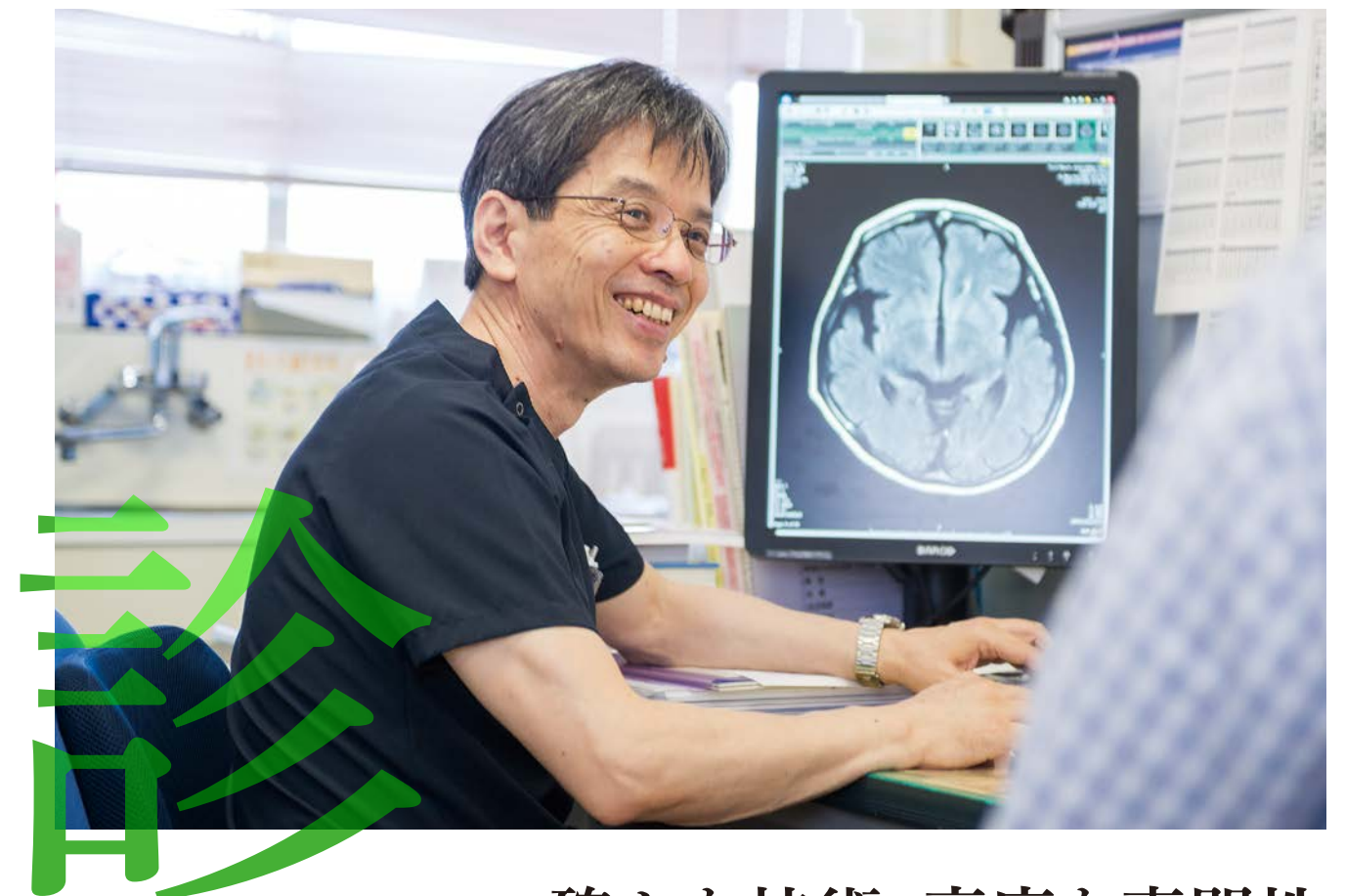




100年目の今

“わたしたちは、「患者さん中心の地域連携」に取り組み、あたたかな信頼のおける医療を提供します。”という理念の実現を目指して、日々取り組んでいる100年目の当院の現在の姿をご紹介します。



確かな技術・高度な専門性



急性期最前線で地域を支える



[小児救急体制]

●小児救急医療拠点病院

〔休日や夜間に入院を必要とする小児の重症救急患者を必ず受け入れ、小児救急医療を行う医療機関〕

当院は、山口・萩医療圏の小児救急医療拠点病院に指定されており、両地区の入院が必要な小児をいつでも受け入れる体制を整えています。

周辺他地区も含め、地域の先生方から多くの患者さんをご紹介いただき、連携して治療を行っております。

●山口・防府地域夜間子ども急病センター

院内に夜19時から22時の間、開業医・勤務医が出務して小児の救急患者さんの診察にあたる『山口・防府地域夜間子ども急病センター』を開設しています。

開設当初は、山口地域を対象としていましたが、令和2年2月から対象地域を防府地域まで拡大しました。

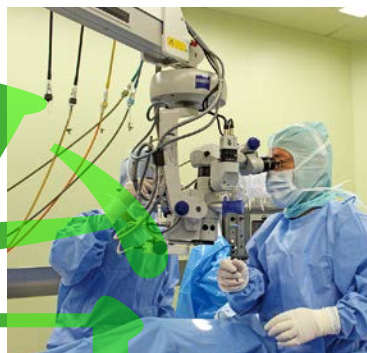
子ども・女性をやさしく守る



内視鏡外科手術センター

～身体にやさしい温もりある
医療で地域の皆様を守りたい～

2016年に、各科の持つ知識や技術を共有して緊密な連携を図り、より高度な内視鏡外科手術を提供することを目的として、「内視鏡外科手術センター」を立ち上げました。外科、整形外科、脳神経外科、泌尿器科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科の7つの部門から構成されています。



からだにやさしい高度な技術



信頼のおける医療



「患者さんの心に寄り添い、 食べる喜びを支える病院食を目指して」

当院で開発した「あっさり食」は、少しでもお口から食べていただけるように、医師・看護師と情報共有し、一人ひとりの患者さんの希望に寄り添い、食べやすいメニューを随所に取り入れました。「あっさり食」を導入して30年、病棟に「笑顔あふれる食卓」が蘇りました。



- ・副食の硬さや形態なども調整可能
- ・主食は、おむすびや麺類、サンドイッチなど200種類以上
- ・メインディッシュの味は、はっきりした味付けに
- ・可愛い器に彩りよく少量ずつ盛り付け
- ・デザートに白玉ぜんざい

信頼に応えるチーム医療

Reliable team medical care

感染対策チーム (ICT) 抗菌薬適正使用支援チーム (AST)

院内感染の発生を予防し、発生時は拡大防止や終息に向けて取り組みます。

[メンバー] 感染症専門医、感染管理認定看護師、感染制御認定薬剤師、感染制御認定臨床微生物検査技師



毎週の院内ラウンド(現場での対策や耐性菌発生の確認)、研修開催や掲示物などによる啓発、抗菌薬適正使用の支援、感染発生時の対策のほか、地域の医療施設と連携して相互のレベルアップを図っています。

栄養サポートチーム (NST)

最適な栄養管理方法を提言することで患者さんの治療・回復・社会復帰を促進しています。

[メンバー] 医師、看護師、薬剤師、管理栄養士、理学療法士、言語聴覚士、歯科衛生士、検査技師、社会福祉士



食は大きくQOLに関わり、それを支える栄養管理はすべての医療の基本です。NSTでは早期介入により栄養状態改善を目指すとともに、患者さんのQOLを踏まえた栄養ケアと栄養治療を実践し「食べる力」をサポートしています。

糖尿病チーム

チームメンバーで糖尿病の知識を共有し、意見を交換しながら、病院全体の糖尿病診療をレベルアップするために活動しています。

[メンバー] 糖尿病専門医、眼科医、歯科医、臨床心理士、管理栄養士、臨床検査技師、理学療法士、薬剤師、歯科衛生士、視能訓練士、看護師、医事課



チームメンバーで協力して「糖尿病だより ステップアップ」を発行しています。内科外来などに置いてあるので是非ご一読ください。また、入院中の患者さんを対象に糖尿病に関する講義を行っているので、ふるってご参加ください。

緩和ケアチーム

「がん」になった患者さんとそのご家族に、治療の早い段階からチームで介入することによってQOLの改善を目指します。

[メンバー] 外科医、緩和ケア内科医、精神科医、がん看護専門看護師、緩和ケア認定看護師、薬剤師、管理栄養士、音楽療法士



「がん」になった方は病気以外にもさまざまな問題に直面します。多職種で構成されたチームで個別にアセスメントすることで対処していきます。QOLの改善は予後を良くすると言われています。チームの関わりがよい効果をもたらすよう努めています。

呼吸ケアサポートチーム (RST)

人工呼吸器が装着されている患者さんに対して、多職種で協働し呼吸ケアを行っています。

[メンバー] 呼吸器内科医、歯科口腔外科医、集中ケア認定看護師、新生児集中ケア認定看護師、臨床工学技士、理学療法士、歯科衛生士



2015年に呼吸ケアサポートチーム(RST)を立ち上げ、患者さんの呼吸ケア・口腔ケアの向上、人工呼吸器からの早期離脱の支援や助言、安全管理、教育、呼吸ケアの標準化を、多職種で構成するチームの活動を通して行っています。

排尿ケアチーム

排尿に関する知識や技術を活用し、排尿自立に向け、病棟スタッフと協働し活動しています。

[メンバー] 泌尿器科医、皮膚・排泄ケア認定看護師、看護師、理学療法士



尿道留置カテーテルを早期に抜去し、尿路感染予防や排尿自立を目指すため取り組んでいます。尿漏れ、残尿感、頻尿といった症状を早く発見し、排尿困難感の改善、排泄環境の調整など排尿自立ができるように支援しています。

認知症ケアチーム

認知機能低下やBPSD、せん妄などによる問題に、病棟スタッフと協働して取り組んでいます。

[メンバー] 認知症専門医(脳神経内科)、認知症看護認定看護師、社会福祉士、リスクマネージャー(看護師)、作業療法士



高齢化が急速に進むなか、認知機能低下やせん妄合併などのため入院治療の遂行に難渋するケースが増えています。臨床現場の問題を素早くキャッチし、対応法をチームで検討し、患者さんの安全とQOL向上を目指しています。

褥瘡対策チーム

様々な職種が専門性を生かしながら、褥瘡(床ずれ・皮膚潰瘍)の予防、改善、治癒を目指します。

[メンバー] 褥瘡専任医師・褥瘡専従看護師・褥瘡専任看護師・栄養士・薬剤師・理学療法士 等



褥瘡は様々な原因で発生し、治癒に時間を要します。私たちはその予防に努め、入院時褥瘡がある方も、治癒や改善してお帰り頂くことを目指しています。退院後も地域の施設スタッフ様や訪問看護師の方々との連携を心がけています。

転倒・転落防止チーム (TTT)

患者の生活行動を支援することを基本としながら、大きな障害に至る転倒・転落を防止するため取り組みます。
目標：転倒転落による骨折・頭部外傷発生ゼロ

[メンバー] GRM(医師)、外科医、認知症認定看護師他看護師、理学療法士、作業療法士、薬剤師、臨床工学技士、管理栄養士、社会福祉士、事務、リスクマネージャー



超高齢社会の日本において転倒・転落による事故は増加しており、転倒による骨折等はADLやQOLを低下させます。多職種による様々な視点から予防策を立て、転倒・転落事故防止に寄与できるよう活動しています。

チーム医療の理念

- (1) 「人間のいのちと健康、尊厳を守る
赤十字の理念である『人道』の具現化を共通価値とする。
- (2) 一人ひとりを尊重し、質の高い安全
患者・家族およびメディカルスタッフ
基盤とする。
- (3) 医療の高度化・複雑化に対応し、か
提供するために、多種多様なメディ
つ、連携・協働する。

(日本赤十字社)

ため、苦痛の予防と軽減に努める」という、
現化を共通価値とする。
・安心な医療サービスを提供するために、
間において、『人間対人間の相互理解』を

つ質の高い安全・安心な医療サービスを
カルスタッフ、各々の専門性を発揮しつ

あらゆる安全管理に最善の努力



安心のホスピタリティを提供



〔医療安全推進室〕 院内の医療安全を統括しています。



〔臨床倫理コンサルテーション〕

医療現場には、多彩な臨床倫理問題（患者診療・ケアにおける倫理・社会・心理・法的問題等）が存在しており、医療従事者にとって判断に迷うことがしばしば起きています。そこで、職員が直面した臨床上の課題について相談を受け、可能な限り早急に多職種チームで対応し助言する「臨床倫理コンサルテーションチーム」を設置しています。

〔患者安全チーム（PSC）〕

組織横断的に患者・家族の意向を尊重しつつ、患者・家族と医療者双方の安全・安心のための活動しています。

＜メンバー＞

GRM（医師）、医師、リスクマネージャー（看護師）、看護師、薬剤師、臨床工学技士、療法士、放射線技師、臨床検査技師、社会福祉士、事務 他

＜主な活動＞

1. インシデント・アクシデントレポートやその他様々な問題に関して、多職種で分析し、対応策を検討・実施
2. 職種間で繋がりを持ち、多角的なアドバイス・ケアを検討し、情報を提供
3. 対応策の実施について評価を行い、更なる改善を検討



継ぎ目のない安心な医療体制



[地域に向けた専門的な研修の場の提供]

●地域NST

2007年11月より山口地域NSTを開催しております。このプロジェクトでは、地域の医療機関、スタッフの方々とともに、勉強会、症例検討や定期的連絡会議等の開催を行い、栄養管理に関する情報の共有、問題点・疑問点等の発信・解決ができる場としていきたいと考えております。

●神経内科セミナー

病棟の看護師向けの勉強会としてスタートしましたが、最近は院内、院外に広く案内を出して医療関係者であればどの分野の方でもご参加いただけるようにしています。これまでに取り上げたテーマは、記憶障害、言語障害、高次脳機能障害、認知症（総論・各論）、BPSD、脳梗塞、神経難病（パーキンソン病・ALS・脊髄小脳変性症）、髄膜炎・脳炎、意識障害、頭痛、しびれ感、痛み、嚥下障害、不随意運動などです。



やすらぎを与える患者・家族支援



[様々なサークルや活動を行っています]

●患者・家族会

CDサークル(クローン病患者さん)、落のとうの会(がん患者さん)、れんげの会(リウマチ患者さん)、糖尿病友の会(糖尿病患者さん)

●ボランティア活動

緩和ケアボランティア、タオル巻ボランティア、図書ボランティア、音楽ボランティア、ボランティアグッズづくり、衣類たたみ

地域とともに



災害救護

Disaster medicine

当院の災害医療・救護活動

災害医療は日本赤十字社の使命です。

日本赤十字社において災害救護活動は、日本赤十字社法や災害救助法などの法的根拠に基づいて行われており、災害対策基本法では、日本赤十字社を国の指定公共機関と位置づけ、国や地方公共団体への協力を義務付けています。

当院は常に救護班派遣体制を整え、国内で大規模災害が発生した際には、速やかに支援活動を開始できる準備を行っています。

また、当院は地域災害拠点病院として指定されており、山口地域で大きな災害が発生した際には、地域の医療を支える砦として、災害時に医療機能を提供し続ける体制や、外部からの支援を受け入れ、支援救護班やDMAT等と協働して活動できる体制を構築しております。

当院の災害救護体制

救護班

災害時に備え、常備救護班6班(救護班要員:医師12名、看護師長12名、看護師24名、主事24名、薬剤師2名)を編成しています。

災害発生時には、ただちに救護班を招集し、日本赤十字社山口県支部と連携を図りながら救護班の派遣を行い、被災地において救護所の設置、避難所の巡回診療、こころのケア活動などを行います。

平時には、全国救護班研修会の受講や、院内災害対策関連研修会の実施、山口県総合防災訓練・中国四国ブロック赤十字合同災害救護訓練等への参加を通じて、救護班要員の救護知識・技術の向上に努めています。

災害派遣医療チーム Disaster Medical Assistance Team (DMAT)

DMATとは災害急性期に活動できる機動性を持った、トレーニングを受けた医療チームと定義されており、当院では2チーム(医師2名、看護師7名、業務調整員4名)を編成しています。

大規模災害や多数傷病者が発生した事故現場において、急性期(おおむね48〜72時間以内)から活動を行い、災害現場での医療だけでなく、被災地の病院機能を維持・拡充する病院支援や、被災地の外に重症患者を搬送する広域医療搬送などの多岐にわたる医療的支援を行います。

DMAT隊員は、隊員養成研修を受講し隊員となった後も、定期的な技能維持研修の受講、大規模地震時医療活動訓練等の実動訓練への参加を行い、専門性を生かした医療支援が行える体制を維持しています。

災害医療コーディネーター

山口県災害医療コーディネーターは、災害発生時に県庁に設置される医療調整本部において、日赤救護班やDMAT等の様々な医療救護班の派遣調整業務等を行い、県内全域での災害医療活動について県へ助言を行います。

当院では、医師1名が山口県より委嘱されています。

また、赤十字救護活動において、大規模災害時の医療ニーズの把握や本社・支部の災害対策本部に対する助言、被災地自治体災害対策本部との連携・調整を図るために日赤災害医療コーディネートチーム2チーム(コーディネーター医師3名、看護師2名、薬剤師2名、主事2名)を編成しています。

原子力災害対応体制

原子力災害時における医療救護活動には被災者に対するスクリーニング、緊急被ばく医療等がありますが、赤十字の救護活動は警戒区域外で活動する一般の救護活動となります。

原子力災害時の救護活動は通常より放射線量が高いことが想定され、空間線量、活動場所、活動時間の中で被ばく線量を考慮する必要があります。そのため、救護班員向けの原子力災害対応基礎研修会に参加し、原子力災害に対する救護体制の構築に努めています。

研修会では、活動する上で必要な防護服の着脱手順、サーベイメータ・個人被ばく線量計の使用方法等を学んでいます。また、線量管理を熟知した放射線対応支援要員(診療放射線技師)も救護班に加わり、被災者の支援活動が行える体制を構築しています。

[未来の医療者向けセミナー]



●ふれあい看護体験

30年以上前から、毎年看護への関心と理解を深めていただくことを目的に、高校生を対象として、「ふれあい看護体験」教室を開催しています。「看護師の仕事が具体的にわかった」、「看護師になりたいと、あらためて決意しました」など夢に向かっていける体験となっています。

■ 院内災害訓練

院内災害対策本部机上訓練・通信機器取り扱い訓練といった、災害対応に必要な技術毎の訓練から、病院全体で直下型地震や近隣での多数傷病者発生事故を想定した、実践的な実動訓練まで行い、病院の災害対応能力を向上させています。



■ 外部訓練への派遣

救護班やDMATの技術向上のため、さまざまな実動訓練へ参加します。多くの訓練は、参加者にシナリオが明かされず、実践しながら判断し、活動を行うなど、実災害に直結する形となっています。



■ 実際の災害への派遣実績

[救護班 派遣実績]

昭和17年(1942年) 周防灘台風
昭和25年(1950年) キジア台風
平成7年(1995年) 阪神・淡路大震災
平成16年(2004年) 新潟中越地震
平成21年(2009年) 防府市土砂災害
平成23年(2011年) 東日本大震災
平成25年(2013年) 山口・萩・阿武大雨災害
平成26年(2014年) 広島土砂災害
平成28年(2016年) 熊本地震

平成30年(2018年) 平成30年7月豪雨(広島県)
令和2年(2020年) 令和2年7月豪雨(熊本県)

[DMAT 派遣実績]

平成30年(2018年) 平成30年7月豪雨(広島県)
平成30年(2018年) 北海道胆振東部地震
令和2年(2020年) クルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス号」
令和2年(2020年) 令和2年7月豪雨(熊本県)
令和3年(2021年) 新型コロナウイルス感染症
クラスター発生施設支援



■ 担当者からのメッセージ



内視鏡外科部長
山口県災害医療コーディネーター、日本DMAT隊員
山中 直樹

日本の災害医療は阪神・淡路大震災以来、超急性期医療が注目されてきましたが、実際の災害では、超急性期の避難所対応から慢性期の仮設住宅での健康管理まで長期的な対応が重要です。このため災害時には、これまで培われてきた豊富な経験やネットワーク、物資のある日本赤十字社は、依然として国民から強く期待されています。一方で、災害時には他の関連機関との連携・コーディネートが重要で、医療機関はもちろんのこと、消防や警察、保健所をはじめとする市町村行政・県行政との連携は特に欠かせません。山口県は自然災害が少ないと言われていますが、災害には人為災害や特殊災害もあり、いつ自分が被災者になるか分かりません。日頃から災害に備えて、院内のみならず関連機関との連携を図れる体制づくりを行っておく必要があります。災害医療に興味を持って訓練や救護班などに参加していただけたら幸いです。



薬剤師
日赤災害医療コーディネートスタッフ
田村 敦子

東日本大震災は、薬剤師も災害超急性期から必要な存在なのだと、他の職種にも我々薬剤師自身にも大きな気付きを与えました。医療チームの一員として処方支援、代替薬を提案することや、圧倒的に物資(薬)が不足する中で、欲しい薬をどうやって過不足なく調達するのか?いち早く安定した医薬品の供給体制を整えることに薬剤師の存在は不可欠でした。

これを教訓とし、薬剤師会、医薬品卸業界、行政と連携して活動する薬事コーディネーターの養成が始まりました。

日本赤十字社においても災害救護薬剤師を育成し、救護班としての活動の他に、災害医療コーディネートチームの一員として、医薬品供給に関する支援活動が行える体制を整えています。

有事の時こそ安心安全な医薬品を届け、他の赤十字救護班や医療チームと協働してあたたかな医療を提供するために、災害救護の現場で薬剤師も活動しています。



看護師長
看護部防災委員会
齋藤由美子

看護部防災委員会は看護師長、係長、各部署の看護師で構成されています。火災・地震・風水害発生時に対応できるシステムを確立し、そしてそのための人材育成を行い、他部門との連携を図り、患者の安全を保障することを目的として活動しています。主な、活動内容は、院内防災対策としての各種マニュアルの見直し、各部署で年1回実施する防火訓練の企画・運営、大規模災害訓練への参加、各防災に関する研修への参加、各部署での防災意識向上に向けた啓蒙活動などです。赤十字看護師の使命として、災害時には救護員として活躍できるスタッフ育成を目指しています。



臨床工学技士
日本DMAT隊員
谷村 知明

赤十字救護班は決して華々しく活動する存在ではありません。被災された皆様に寄り添い、支えることが我々の大きな任務です。また、医師・看護師とともに活動する主事は、医師・看護師の活動を支える存在でもあります。危険な環境の中で、より安全に活動するには主事の行動力・判断力はとても重要であり、継続した訓練が必要となります。

私は、2016年4月の熊本地震で初めて出動しました。訓練を重ねてきたつもりでしたが、いざ実働すると歯が立たないことも多く、悔しい思いを多く残しました。

そんななか、避難所で掛けて頂いた「救護班の人が来ると安心するね」という言葉で、「私ひとりでは大きなことができなくても良い。赤十字というチーム力で寄り添い続けることに意味がある」と感じました。

いま私は、災害救護活動を行いつつ救護員育成にも関わらせて頂いております。世代や病院の壁を超えたこのような活動ができることに誇りを持っています。

新型コロナウイルス感染症との闘い

Correspondence to new corona

新型コロナウイルス感染症の概要

2019年12月、中国において原因不明の肺炎が確認され、翌1月9日、WHOはこの肺炎の原因が新型コロナウイルスであると発表しました。1月16日には国内一例目となる感染者が確認された後、2月には豪華客船での感染拡大が起きました。その後も、感染者数は増加の一途をたどり、感染拡大を防ぐため、国民は生活様式を見直し、旅行・帰省・外出・会食など、多くの方が楽しみとしていることを控える生活を強いられています。2021年10月現在、国内で170万人を超える方が感染する事態となっていますが、高齢者からワクチン接種が進められた結果、高齢者の感染者や重症者が減っています。今後、ワクチン体制の確立や治療薬等により状況が落ち着くことが期待されます。



当院の対応

当院は、2020年2月に帰国者・接触者外来を開設し、専用診察室を増設することで、発熱患者の応需体制を強化するとともに、一般外来への発熱患者の紛れ込み防止に努めました。

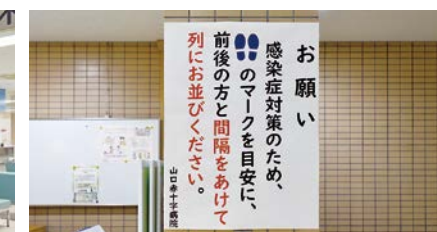
続く3月、感染対策用品の不足が懸念され、関係者を集めた防護具会議を毎週開催し、院内の在庫管理、物品の調達、職員への使用制限などを検討しました。実際に不足が生じたものは、職員が手作りですることで不足を補い、流通が不十分な中でも、必要な部署に資源を集中させるよう取り組みました。

また、4月より入院協力医療機関の役割を担うこととなり、病床を15床用意しました（地域の流行状況により、最大23床まで増床）。設備・物品整備のほか、従事するスタッフへの感染対策に関する教育、後方支援など、患者さんの受け入れまでにすべきことは山積みの状態でした。

数多の情報の収集・整理、人員の統制を目的に、5月に新型コロナウイルス感染症院内対策本部を立ち上げました。ICD門屋医師、ICN神崎看護係長、総務企画課佐々木係長を中心に、災害時の本部運営に精通したDMAT隊員によって動き出し、赤十字救護班の主事を含め、多くの職員で本部業務を行っています。

さらに、院外活動として、ダイヤモンド・プリンセス号、クラスター発生に見舞われた医療施設、宿泊療養施設、クラスター対策などで支援を要した沖縄県、地域外来・検査センター、ワクチン接種会場などへ職員を派遣しました。

当院は、新型コロナウイルス感染症によって、職員が結束して立ち向かう大きな力を得ることができました。今後、新たな感染症が発生した際も、怯むことなく対応していく病院でありたいと思います。



■ 担当者からのメッセージ



副院長・第一脳神経内科部長
大堀 展平

2020年11月に東4病棟へのコロナ患者受け入れが開始されて以来、私もコロナ診療に直接携わるようになりましたが、2021年2月からコロナワクチン接種を統括する役目も加わり、尼崎薬剤部長と共にワクチン接種ワーキンググループを立ち上げ、ほぼ毎週会合を開き、ワクチン供給の窓口となる自治体(県、市)担当者と協議しながら、接種日程や会場の決定、接種に関わる医師、看護師、コメディカルスタッフ、事務職員の手配などを取りまとめました。ワクチン供給の大元である国の混乱で実務を担う自治体も方針が二転三転するなか、千人近い病院職員の先行接種を終え、その後高齢の通院患者、病院職員の家族、一般市民などに徐々に対象を広げていくことが出来ました。当院の持つ潜在的な力(主には人的資源)のお陰で大規模な接種業務を進めることができたことを誇らしく思います。



看護師長
塩見 静子

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)患者さんを受け入れるにあたり、2020年4月、当時地域包括ケア病棟の準備病棟であった東4階病棟を転換し、COVID-19専用病棟を開設しました。開設に向けて、入院患者さんの転棟、スタッフの人事異動、受け入れ患者を想定しながら物品準備やゾーニング、マニュアル作成など、急ピッチで進めていきました。

同年11月から、COVID-19患者さんの受け入れが開始となり、準備していた軽症・中等症用の10床はすぐに埋まり、受け入れ病床を最大23床まで拡大して対応しました。未知の感染症に対して試行錯誤しながら、多くの職員の協力のもと、1歳から87歳までの患者さんに対応し、入院患者さんは2021年9月には300人近くとなりました。

次々に変異するウイルスに脅威を感じつつも、今後も多職種と協力し、患者・職員双方の安全を確保しながら、COVID-19対策に取り組んでいきたいと思っています。



第二小児科部長 ICD
門屋 亮

新型コロナウイルス感染症対策は、2009年の新型インフルエンザよりはるかに大規模・長期となりました。まだ禍中ではありますが、これまでを振り返ります。

当初の水際対策では全科の協力で発熱トリアージを実施しました。入院受け入れにあたっては担当医を院内から公募し、曜日担当・オンコール体制としました。参画の先生方でチームワークよく運営でき、基礎疾患対応等には多科協働のメリットも発揮されています。予防接種の問診医にも多数の協力を得ました。

院内外の折衝や情報整理にあたる対策本部のほか、病棟運営、PCR等の検査体制整備、予防接種等多くの部署に尽力いただいています。

さらに病院入口の誘導や検温、発熱外来、予防接種会場などを多職種の方々が静かに力強く支えてくださっています。彼らなしには諸々の対策はなし得ません。

これら多くの経験は当院の貴重な財産になると確信しています。



看護係長 ICN
神崎 多紀子

2019年12月31日のニュースで知った「中国の謎の肺炎」が、その後、世界中に拡がり、私達の生活を一変させてしまうようになるとは、当時の私は想像ができていませんでした。

既に10年以上の長い間、感染管理を担っていましたが、感染対策に必要な消毒用アルコールや感染防護具の不足との闘いは初めての経験でした。

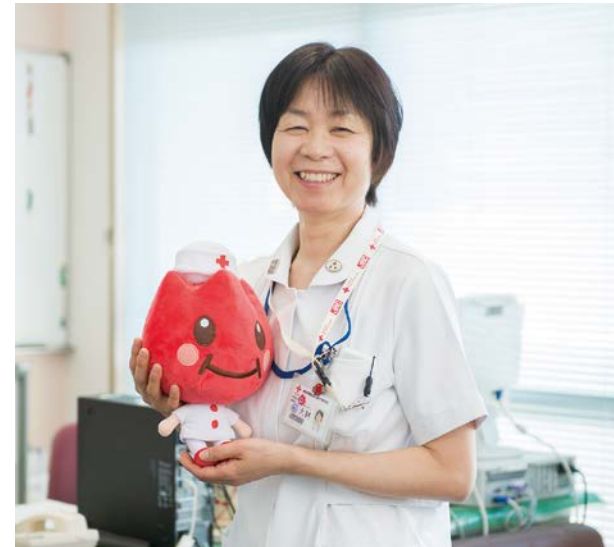
そして、マスクの使用を制限するという、これまで指導してきた感染対策とは180度異なる方向へ舵を切らざるを得なかった時の気持ちは、忘れることはできません。“院内で感染を拡げない”・“職員の命を守る”ことを常に考え、一日一日を過ごしてきました。

その思いを共有できるCOVID本部の仲間たち、様々な問題の解決方法を一緒に考え、ともに行動をしてくれる職員の方々に恵まれているこの環境に感謝をしています。

看護師の養成

Training of nurses

人の心に寄り添える看護師を育て、地域住民の生命と健康、尊厳を守る



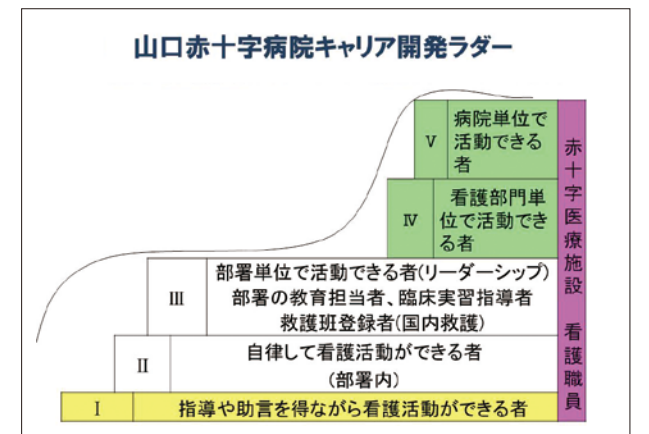
総合病院 山口赤十字病院
看護部長 認定看護管理者
大林 由美子

いち早く看護師養成に取り組み、赤十字社の高い看護実践を継承

日本では明治23年から赤十字社による看護師養成が始まり、山口県では明治30年に開始されました。当初は主に県立病院に委託していたそうですが、大正9年に県立病院が日本赤十字社山口支部病院として移管されると同時に、日本赤十字社山口県支部病院救護看護婦養成所が創設されました。つまり、山口県でいち早く継続的かつ本格的な看護師養成に乗り出したのが当院です。創設後、改称を重ねながらも、84年間で3,366名の卒業生を輩出し、平成17年3月に閉校となりました。また、大正2年には2年課程の産婆養成所を併設し、昭和23年3月までに117名の卒業生を輩出、戦時中の昭和16年4月から昭和22年までは特例として臨時救護看護婦を養成し、515名の乙種救護看護婦を世に送り出しています。振り返ると、当院の歴史は山口県における看護師養成の歴史と言っても過言ではないと私は思います。現在は「看護学校」という形ではありませんが、日本赤十字社の高い看護実践を後世に引き継ぐため、今後も看護教育を継続していく所存です。

目指すのは、高い倫理観を持って人に寄り添える看護師の育成

当院が目指す看護師像は、①根拠に基づいた判断による質の高い看護サービスが提供できる、②豊かな人間性と思いやりをもち、心温まる看護が提供できる、③医療チームの一員として、患者さんとご家族を中心に、より良い人間関係を築き、調整能力を発揮できる、④看護専門職として自己研鑽に努め、成長し続けられる、⑤社会人としてのマナーを身につけており、赤十字の一員として責務を果たすことができる、⑥変化に柔軟に対応し、チャレンジする勇気をもってリスクを引き受けることができる人材です。病院全体や地域の看護の向上に努める専門看護師や、認定看護師の資格取得者もあり、令和3年8月現在では、当院には専門看護師2名、認定看護師13名が在籍しています。この2つの資格とは別に、医師や歯科医師があらかじめ作成した手順書によって特定行為(診療の補助)が実施できる特定看護師を目指す者もいます。ただ、高い実践力は勿論のこと、それなりの期間や経済的な負担を要するため、誰もが専門看護師・認定看護師・特定看護師になれるわけではありません。そのため、当院では継続教育のしくみとして「赤十字施設のキャリア開発ラダー」を導入し、「指導や助言があれば看護活動ができる者(新人)」から、「部署内で自律した判断ができる者」、そして「部署単位で活動でき、教育担当者や実習指導が担える者」というように、段階を踏んで成長できる仕組みを構築していま



す。つまり、院内での経験学習や研修によりジェネラリストに成長できるしくみがあるのです。このような環境を今後より一層発展させ、全ての看護職がキャリアアップできる組織を目指します。

質の高い看護の提供だけでなく、地域住民の健康の保持増進も担う

当院は「『患者さん中心の地域連携』に取り組み、あたたかな信頼のおける医療の提供」を理念に掲げ、地域の中核をなす病院として、地域住民の皆さんの健康と生命を守ることを役目としています。高齢化が加速する現在、厚生労働省が地域包括ケアシステムの構築を推進していますが、地域を見渡した時に、私どももその必要性を痛感しています。そういった現状も踏まえ、以前より、当院の看護職は病院内での看護だけでなく、災害時の対応や介護予防の対策などいくつかのプログラムを持って、地域交流センター単位で講習会を開催するなど、病院外でも健康教育を行ってまいりました。この活動は、地域住民の皆さんに生命や健康に関する有益な情報を発信できるだけでなく、地域の方々とふれあい、地域をより深く理解する機会となっており、看護力の向上にもつながっています。しかし、残念なことに新型コロナウイルス感染症の影響を受け、現在は思うような活動ができていません。この多くの制限がある中で、いかに地域とつながり、いかに地域住民の皆さんの健康と生命を守っていくかが新たな課題となっています。

山口県立大学との包括連携協定が地域の看護教育をより充実させる

地域連携の取り組みの一つとして、令和2年2月に締結した山口県立大学との包括連携協定が挙げられます。平成8年に山口県立大学に看護学部が新設された当初から実習生を受け入れ、大学主催の各種研修会や学会へ参加、当院の職員による看護研究に対して大学側から指導をいただくなど、さまざまな形で交流・連携は図ってきましたが、正式な締結により、より強固な連携体制を整え、これまで以上に看護教育に力を注げるようになりました。また、令和元年には山口県立大学が臨床教育のさらなる充実を図るため「臨床教授制度」が創設されました。令和2年度から、臨地実習で実習指導を行う立場にある当院の看護職に臨床教授・准教授・講師を付与していただいております。令和3年度は臨床教授19名、臨床准教授38名、臨床講師5名が登録されています。現在、コロナ禍の影響により、臨地実習を受け入れることができ



ない病院や施設が増えていますが、当院では引き続き看護学生を受け入れており、今後も指導を継続する予定です。当院看護部には、目の前の患者さんの看護だけでなく、次の看護の担い手を育て、つないでいくという重要な役割があります。山口県立大学との包括連携協定は地域の看護教育におけるさらなる一歩と言え、今後の展開に大きく期待しています。

この先もなくなることのない人に寄り添う看護という仕事

進む少子高齢化、そして、生産年齢人口が減少の一途をたどる現代社会において、看護職を目指し、働き続けてくれる人材をいかに確保できるかが重要な課題です。それと同時に、地域住民が受ける看護の質を担保するためには、質の高い看護が提供できる人材の育成も必要になります。私たちは看護職のやりがいや魅力をもっと発信していくと同時に、看護職が



働きやすい環境、長く続けられる環境、キャリアアップできる環境を整えていかねばなりません。なぜなら、どんなにAIが発達しても、IT化が進んだとしても、人の心に寄り添う看護という仕事は、絶対に必要とされる仕事だからです。また、健康で幸福な生活という人間の普遍的なニーズは、時代が変わっても変わることがなく、それに応えていけるのもやはり看護職だからです。私たち看護職を含む医療従事者は、近年、「かつてない」というような大規模自然災害や新型コロナウイルス感染症の対応など、未曾有の出来事をさまざまな形で経験してきました。医療を取り巻く環境の変化は著しく、この先もどんな状況が待っているかはわかりません。しかし、日本赤十字社の使命である「わたしたちは、苦しんでいる人を救いたいという思いを結集し、いかなる状況下でも、人間のいのちと健康、尊厳を守ります。」に則り、私たち赤十字の看護職はその専門性を活かし、変化に柔軟に対応しながら、看護という仕事を全うします。また、患者さんやご家

族の声にならない声を察する力を有する、質の高い看護が提供できる後続の育成を当院の責務とし、これからも一歩一歩進んでまいります。



山口赤十字病院の質実剛健な気風と共に



山口県立大学 副学長
田中 マキ子

この度は、創立100周年を迎えられ、誠に可喜申し上げます。本学と山口赤十字病院様とは包括連携協定を締結させていただき、共に協力し・互いを高めあっていく関係構築が図られております。特に看護師養成では大変お世話になっており、引き続きの関係強化をお願いいたします。

100周年のお祝いに思いますことは、貴院の質実剛健な気風の素晴らしさです。私が付属看護専門学校の非常勤をさせていただいていた頃、フィジカル・アセスメントの講義で血圧測定をしました。赤十字で学ぶ学生さん方は、基本が完璧で間違い事はありませんでした。それに比べ本学の学生さんは、講義から時間があけば、実技においては惨憺たるもので、「教えたよねー」と教員が頭を抱える事態に至ります。その時、「どうしてこんなに完璧にできるのですか？教え方のコツは？」と思わず先生に聞きました。その答えは、「なんども反復練習をすることです」と言われました。

ここに赤十字の教育理念と方法があると思いました。ベッドサイドケアを大切にす。患者様を大切にす姿勢は、看護を掘り下げる営みに通じます。昨今医学の世界は劇的に変化し、優れた工学機器に取り囲まれた中での治療・ケア実践が求められます。しかしどれだけ機械化が進んでも、人の目で・人の手で・人の感性で関わることは廃れません。この事は、貴院と本学が共同し次世代の看護師を育てるうえで要になることと思います。

根拠に基づく看護実践は重要ですが、誰からも信頼され、強く・たくましいその様は、まさしく質実剛健な気風で満ち溢れている貴院からしか学べないことです。素晴らしい貴院の気風に触れながら、貴院で看護の楽しさと奥深さを学ぶ機会に恵まれる初学者を、ひとりでも多く輩出できるよう、貴院との連携を強めつつ、切磋琢磨のお付き合いをこれからもお願いしたいと切望し、100周年のお祝いいたします。

専門・認定看護師、特定行為研修修了者

Specialized / certified nurses, specific medical practice nurses

●**専門看護師**…専門看護分野の専門性を発揮しながら、実践・相談・調整・倫理調整・教育・研究の6つの役割を果たし、施設全体や地域の看護の向上に努める看護師

●**認定看護師**…認定看護分野ごとの専門性を発揮しながら、実践・指導・相談の3つの役割を果たし、看護の質の向上に努める看護師

●**特定看護師**…2015年10月に厚生労働省が施行した「特定行為に関わる看護師の研修制度」による特定行為研修を修了した看護師。専門的な知識と技術が必要とされる特定行為(診療の補助)を、医師や歯科医があらかじめ作成した手順書によって実施することができる。

がん化学療法看護認定看護師



鹿毛沙智

薬物療法を受ける患者さんの生活に視点を向けたケアを大切に、多職種連携に努めています。

集中ケア認定看護師



弘中祐介

人工呼吸器を装着するなど、集中治療を要する患者様とご家族の方へサポートさせて頂いています。

感染管理認定看護師



神崎多紀子

地域の患者さん・ご家族の方々に安全な医療・看護を提供できるよう、専門的知識を活用し、感染管理に努めます。

皮膚・排泄ケア認定看護師



岩本淑子



江村真弓



柳井幸恵

創傷・ストーマ・失禁の3つの領域を、それぞれに専門領域を持ち、共有しながら活動しています。

NICU 新生児集中ケア認定看護師



竹中陽子

一人一人のお子様に合った看護ケアを提供し、安心して退院後の生活が送れるよう支援します。

特定行為研修修了者



柳井幸恵

創傷管理関連・栄養及び水分管理に係る薬剤投与関連を終了し、患者の治療に参加しています。

認知症看護認定看護師



原陽子

患者さんの意思表出能力を補い、権利を擁護し「その人らしさ」を大切にしたい看護活動に努めています。

摂食・嚥下障害看護認定看護師



吉岡慶美

患者さんが永く安全に食べ続けるためにはどうしたら良いか、他職種と考え支援を行っています。

糖尿病看護認定看護師



澤山恵

「その人らしい生活」を尊重しながら、糖尿病治療と上手く付き合えるようサポートに努めてまいります。

手術看護認定看護師



野口真理子

患者さんがより良い周術期を過ごすことができるよう専門的知識や技術を活用し支援しています。

緩和ケア認定看護師



原淳子



小野芳子

がんの診断時から症状緩和やご家族へのケアをタイムリーなかかわりができるような活動しています。

がん看護専門看護師



光永祐子



金子美幸

がんの専門的な知識と技術を活用し、症状を緩和するお手伝いや、相談、教育活動をしています。



研修医座談会

Resident Roundtable



後列左より2年次:臨床研修医(基幹型)野中裕文、臨床研修医(基幹型)岸川泰之、1年次:臨床研修医(基幹型)中司琢人、臨床研修医(基幹型)重安哲志
前列左より1年次:臨床研修医(基幹型)中野暖基、臨床研修医(協力型)大宅裕之、臨床研修医(基幹型)山田真理子、臨床研修医(協力型)久恒慶地

Q 臨床研修病院を選ぶ際のポイントと、当院を選んだ理由についてお聞かせください。

<野中> 働きやすいかどうか、だと思います。他職種の方とのコミュニケーションがとれる職場かどうか。山口日赤は職種間の垣根を越えて、コミュニケーションがとりやすいですね。

僕は2月に病院見学に来て、すぐに二次募集への応募を決めました。多くの診療科がそろっていて、自由に研修プログラムを組めるので、来てよかったと思います。

<山田> 病院の雰囲気、あと立地や利便性も重要です。私は実家から近いことも決め手でした。病院見学で実際に指導医の先生や先輩研修医の先生方とお話して、病院の雰囲気を知ることが大切ですね。私が見学に来た時には、指導医の先生がとても丁寧に説明してくださいましたし、当時の研修医の先生方の仲の良さにも魅力を感じました。立地でいうと山口日赤は山口県の中央部にあり、どの方

面にも移動の便がいいです。

<重安> 当院は山口大学をはじめ様々な大学と関連があり、山口県で研修しながらいろいろな大学出身の先生方のご指導をいただける環境が魅力的でした。2年間の初期臨床研修を終えた後の進路を考えても、選択肢が広がると思って選びました。





Q 実際に当院で研修されて、思うことは何かありますか？

<岸川> 病院職員は優しい方が多く、研修医にとって、とてもありがたい環境だと思います。研修内容としては、自由度が高いので如何に充実させるかは自分次第、常にモチベーションを高く持つことが必要ですね。

<久恒> 患者様に対してだけでなく、研修全般でコミュニケーション能力が求められると感じます。研修ローテーションの中で鍛えられていますが、看護師さんやメディカル職員の方に助けられることも多く、ありがたいです。

<中司> 院内の各診療科(専門分野)全体で連携して診療にあたることも多く、チーム医療や総合診療の勉強にもなります。症例について初診から入院、退院(転院)までの一連の診療の流れを経験できることはとても貴重ですね。

Q 当院での研修ローテーションや、副当直についてはいかがですか？

<中野> 研修ローテーションを自由に組めて、いつでも変更できるところがいいですね。研修医の希望に柔軟に対応してもらえるのも、研修医の人数が多すぎず一人一人の研修を病院全体で支えて下さるおかげだと思います。

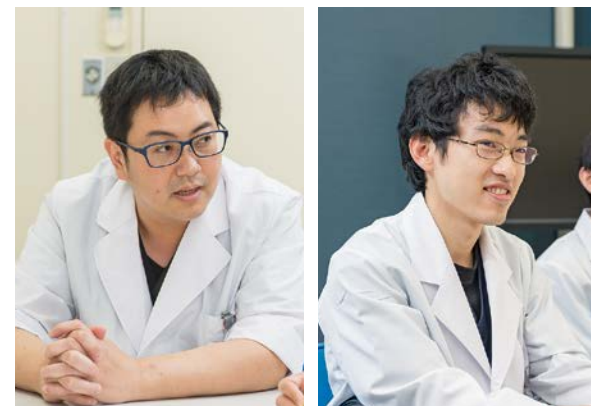
<大宅> 僕は外科志望でもあり、オリエンテーション後すぐ外科のローテートでしたが、外科研修では手術が主で実際に縫合や結紮をさせてもらうことも

多く、手技練習の大切さを痛感しています。4月のオリエンテーションの中でも手技練習がありましたが、研修の合間にも研修医室で練習しています。

<野中> 副当直は指導医・上級医の先生方からマンツーマンで指導していただく絶好の機会。報告・連絡・相談を怠らないことで、自分の成長次第で主体的な当直業務ができるようになります。ローテートしていない診療科の先生とも交流できて、いい刺激になります。

<重安> 副当直に限らずですが、研修中は主体性が大事ですね。指導医へ積極的に希望を伝えて、機会を逃さないこと。他科の研修中でも珍しい症例や手技の練習などを経験させてもらえます。

<岸川> 副当直に関しては、当院は輪番で2次救急を担っているのも、かなり豊富な救急症例を経験できることに驚きました。軽症から重症まで、包括的に初期対応を学べますね。救急診療はもっと経験したいので、2年めでは協力病院の和歌山医療センターに3次救急の救急部門研修に行かせてもらう予定です。



Q 当院での臨床研修のPRポイントについて教えてください。

<久恒> 忙しすぎないので、勉強や趣味など自分の時間をつくることのできるのありがたいです。

<中司> 2年間で共に学んでいく仲間とはしっかりと切磋琢磨でき、自分の選択や周りの選択を比較しながら自分のこれからの進路やキャリアを考えていくことができます。それに加えて、当院は他病院からの短期・長期の協力型臨床研修医も多くいるため、様々な病院の研修医と一緒に研修を行うことができます。他病院の研修の話を知ると大変参考になります。同じ研修医同士で交流を深めることができます。

Q 最後に、医学生の方へメッセージをお願いします。

<久恒> 自分が1番したいことを考えて研修病院を選ぶといいと思います。早いうちに病院見学に行って、それぞれの病院でどのような研修ができるかをイメージするといいですね。

<野中> 志望分野が明確でなくても、とにかく何に



でも興味を持って意欲的に！初期研修の2年間は医師になって最初の2年間で、専門外のことでも無条件にたくさん学び経験できる貴重な2年間です。いろいろと経験する中できっと自分に合った進路が見えてくるはずです！

<中野> もちろん国家試験に向けての勉強はしっかりとやること。臨床で必ず役に立ちます。そのうえで、学生のうちにしかできないこと(旅行やアルバイト経験など)で時間を有効に使っておくことをお勧めします！

